若き日の人生ノート

若き日の
人生ノート

東京外語大助教授
串田孫一著

東　京
學　生　社

〔著者略歴〕

一九一五年東京に生まれ、一九三九年東大文学部哲学科卒業。上智大・東京高校をへて現在、東京外国語大学助教授。専攻は哲学、仏文学。著書には「苦悩と思索」(角川書店)「若き日の思索のために」(筑摩書房)「哲学と人間愛による思索」(河出書房)「フランス思想史」(春秋社)など数多くある。

若き日の人生ノート　〒130.

1956年7月1日第1刷印刷
1956年7月5日第1刷発行

著者　串田孫一（くしだまごいち）　東京都三鷹市牟礼911
発行者　鶴岡正美　東京都新宿区矢来町38
印刷所　横山印刷株式会社　東京都墨田区亀沢町1ノ3

発行所　株式會社　學生社　東京都新宿区矢来町38　振替・東京18870番

高陽堂・製本　落丁・乱丁はお取替えします

目次

序　章　夢をいだく人　6
第一章　第二の誕生　16
第二章　青春について　26
第三章　美しき友愛　35
第四章　背のびについて　45
第五章　愛のモラル　55
第六章　仲間はずれ　65
第七章　隠れてすること　73
第八章　日々の芸術　81
第九章　日記について　89

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第十章　賢明ということ　100
第十一章　専門家のこと　108
第十二章　旅　立　つ　人　116
ヒューマニズム　123
平和について　136
勉強について　139
私の好きな青年　142
十代の危機　148

若き日の人生ノート

序章　夢をいだく人

きょうは夕方の西空がじつにきれいだった。冬から春さきにかけて、昼頃になると冷たい季節風が強く吹き出す日がこの武蔵野の一隅には多いが、その風が少し鎮まりかけた日暮れに西空を見ると、冷たく燃えているといったらいいのか、ともかく私達の地上に住むものの、その中にはいって感じることのできない美しさがある。そしてその空には、たいがいのときに雲がちらばっている。ちらばっているといっても、それがお互につながりをもっていて、そこから離れて行く雲は金色の光のような瞬間を見せて消えて行く。

気象学の本に、「夕暮層積雲」と書いてあるのは、この雲だと思う。そしてこの雲は、太陽の姿をうしろにかくしながら、刻々に色をかえ、最後には紫色になって、そのまま闇の中へ見えなくなる。

この夕映えの空が、何か美しい音によってのみ構成されている壮重な音楽のように思われるのは私ばかりのことなのだろうか。人々はこの空の色についての想い出をあまり持っていないのだろうか。私はこれまでの生涯のうちに、この空の持つ魅惑と力とに牽きつけられて、街を歩きなが

ら、田園の小径を散歩しながら、浜辺をさまよいながら、否応なしに佇まなければいられなかったことがこんなにたくさんあるのだが……。

まあ、他人はどうでもいい。他人は私を嘲ってもかまわない。私はまだ幼い日から現在にいたるまでの、この夕暮れの、どこか洗礼に似たところもあるような、静かな感動を、想い出すままにいつか並べてみたいと思うが、ここではただ漠然としたことでいえることは、私はもうかつてのように、その空に未来の映像を想い描くことがなくなっているということである。

その空が、いま壮重な音楽のようだと、書いたけれど、私は音楽という芸術を、ただ人生や、あるいは人の行うさまざまの儀式の装飾とのみ考えることはできないからそういったのだ。ギリシアのピュタゴラスが、宇宙のどこかに、巨大な竪琴を想像したのも、たぶん、こうした古代の夕映えの中に佇むかれが、大いなるハーモニイを、その耳では聴かなかったかもしれないが、五感以外のどこからか感じたからにちがいない。だからそれは決して一つの比喩ではなかった。

古代人でない私は、ピュタゴラスのいったことを理解することはできても、同じような神秘的な感じ方はできない。けれども私は、宇宙の中で奏でられている音楽の発見よりも、何よりも、夕映えの中でそのときそのときの私はいいしれない解放を味わってきた。

たしかに解放である。何からの解放だろうか。それはわからないが、この地上には見つけられない自分のふるさとがあそこにあり、それを想って解放される、そういう感じである。そしてそ

のとき私は自分が街の中を、何のために歩いているのか、浜辺にどうして来ているのかも忘れて、ちがったかおりの大気に酔うめである。

＊　　＊

今の私が未来の映像を想うことはできにくくなってはいても、その解放感には少しもかわりはない。かつての私は、殆んど自分のうしろをふりかえることを知らず、未来にきっぱりと向かって、明かるかった。それは、力を入れて引きずらなければならない重たい過去がなかったわけではないが、未来へ進もうとする力が、何倍も盛んだったからだ。

そういうときに、あの金色のふちどりの雲の彼方にどんな幸の国を見ようとしただろうか。計画もたくさんあれば、それの成就した姿も目に浮かんだ。

私は小学校から中学へ移るのに試験をする必要のない学校にいたから、高等学校へはいるときに初めて入学試験というものを受けた。顔見知りの全然いない高等学校へ、友達と三人で願書を出しに行った。その書類と引き換えに受け取った受験票を見ると、十三番だったので、そこにいた友達二人は変な顔をして私の顔をのぞきこんだ。こんな縁起の悪い番号にあたって気の毒だと思ったのかもしれないし、それと同時に、試験にあまり自信のない私達は、落ちたときにはその番号のせいにすれば幾らか気やすめにもなることなので、友人の顔には羨ましい表情もたしかに見えていた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

入学試験の朝、私達はまたどこかの駅でいっしょに落ち合って学校へ行った。受験者のおどおどした群れの中にいると気持が変になりそうなので、合図の鐘が鳴るまで、裏手の広い運動場の方へ歩いて行って、まだほんの春のきざしが見え始めたばかりの草原に腰かけていた。そしてとりとめもない話をしていたが、私達めいめいは、そんなに落ち着き払っていたわけでもなかったから、話に身を入れることをひそかに警戒し、やはり不安に包まれてしまうのだった。

私がそのときのことで覚えているのは、話し合っていた内容ではなく、運動場の向こうの、コンクリートの塀にそって並んでいる小さな家のどこかで、ラジオを大きくかけていたことである。ラジオ体操の、おかしくなるほど元気のいい先生が、もういつも聞きなれた音楽に合わせて、号令をかけていた。それは力いっぱいの声ではあったが、私達のその気持を知らないように、実にのんきに響いていた。

＊　＊

運よく、私はその試験に合格してしまったので、三年間の高校生活にはいることになったのだが、その発表の日の夕方の空もきれいだった。

たしか午後の四時に、学校の玄関先に合格者の名まえが貼り出されるというので、私は自分で見にいった。自分で見に行く勇気のないものが多いのか、父兄らしい人が大勢いた。

私はそこで自分の名まえを見つけた時、故意に悦びをかくして何でもないことのように思った

ことがどんなに嬉しかったことだろう。そしてむしろ足を重たくはこびながら、高等学校の近くを流れている川の土手をぶらぶら歩いて来た。

三月の末、風が吹いていたかどうかは覚えていないが、もう僅かでいらなくなる中学校の帽子や制服に、何となく名残りを感じたり、始めて歩くその土手をどこまで歩いて電車に乗ろうか、それよりも、この入学を誰と誰とにどんなことばで知らせよう、そんなことも考えていたにちがいない。

けれどもそれよりも、だんだん私一人を祝福してくれるためのように赤く染まり出した夕映えは、何度も足をとめさせた。その土手に、スミレやイヌフグリやキジムシロなどが咲いていたかもしれない。西空に並んでいた雲は、今見れば典型的な夕暮層積雲だったかもしれない。けれどもそんなことにはまだ気を取られることもなく、新しく決定された三年間の生活の中に次々と夢を作り、またその夢はすぐに、滑稽なくらいに先へ先へと私の未来を築いた。

郊外から町へはいり、そこで一番高い建物である百貨店の屋上へのぼった。エレベーターがあるのに、階段をのぼって屋上に出た。そういう閉店まぎわだったせいか、屋上にはほとんど人がいなかったが、その手すりによりかかって、もうこれ以上は燃えられないほどに赤く光る空を眺めた。

*　*

私の、未来の空に夢が築いたものは、ひどく現実的な、細かなことであったり、それを追っているうちに、幻想になったりしたりするものだった。試験勉強のために控え目にしておかなければならなかった小説を、今夜は夢中になっても読めるぞと思って、ただそんなことにうれしくなったり、あすもこうしてどこかの屋上から町の屋根を終日眺めていてもいいことが、ひどく自由な感じを抱かせたり、と思うと、私はきょうから思いきって不要なものを棄て去り、頭の中をきれいさっぱりに、新しいことばかりで埋めてしまいたくなり、その新しいものが、きれいな色彩で、まるで万華鏡をのぞきこんでいるように、ちらちらと抽象的な映像を見せるのだった。それは、こうした安心感の中からふきこぼれるように湧いてきたものでもあろうけど、夕映えの空に誘い出されたもののような気もするのである。

＊　＊

私がこうしてはいって行った高校生活は、悦びばかりのものではなく、悲しみや不快も多かったが、またそれなりに、今となれば貴重な経験も多く、いろいろのことを覚えた。

それが今となってかなり定着した姿で想い出されるのだが、その一つ一つについては、これからぽつぽつと取り出して書く機会があるだろう。

けれどもその中で、かなり肝心なことだと思うことを一つだけ考えてみると、それは、夢を持つ人間になるということである。

夢ということばが、すでに誤解を招くような意味を含んでいるので、私も用心してこのことばを使うことにしているのだけれど、この時代に具体的な人生の方向を作るということではない。そういう方針まで決められる人があれば、それはもちろん結構なことで、それに誤りがない限り、若いあいだでなければ持ち得ない力をもって進むのがよいだろう。けれどもそれは普通には無理な注文である。というより私がいう夢とはかなり違うことである。

夢を抱く人というのは、未来を常に美化して考えている一種の理想主義者をも含めて、ともかく眼をかがやかせながら自分の前方を眺めることを忘れない人である。だからそれは老人であっても一向に構わない。老人が、あまり遠大な計画を抱いているといって嘲る人もいるだろうが、これはまちがっている。その計画が正しければ、たとえ老人に実現の時が与えられていなくとも、次の時代にそれをうけついで実現させる人が必ず出てくるだろう。

私達は、生涯でなし得ることを、絶対的な基準にして考える癖がついているようであるが、それはまちがっている。そしてその夢が、大きすぎるといって、正常な人間に扱わない人もいるが、一体これまで人間が抱いた夢で、結局それが大きすぎてどうにもならなかったということがどのくらいあるだろうか。近視眼になる傾向が私達には非常に強いような気がしてならない。

*　　*

夢を持たなくとも、人生は、器用さがあれば、要領がわかっていれば、まずまず大して困るこ

となくすごして行くことができる。もっとひどいことばを使えば、生きる意欲がなくとも、習慣によって押し流されるように生きて行くことができる。そういう人がずいぶん大勢いる。そしてそういう人の口から、何のために生きているのか、それはむずかしく考えだせばわからなくなるにきまっているけれど、そういう人の場合は、そうではなく、自分のしていることの目標がどこにあるのか、それがわからなくなったのである。けれども更にもう一歩意地悪く言えば、それらの人の中には、最初から目標などを考えたこともない人がいるような気がする。つまり夢を抱いたことがない人、現実のその日その日の処理に、巧妙な生き方を考えていたために、ついぞ夢を抱く暇もなかった人である。

そしてそれらの人が、たとえ何かの折に夢みることがあっても、それはいたって狭い、夢というにしてはいかにも息苦しいものであるだろう。そして、すぐにその気持を自分で否定して、育てるようなことは決してしないだろう。

*　　*

私はここで、逆に夢ばかりをふくらませて、実際に何もしない人ができてしまったらどうするという気の早い非難を想像する。それはいうまでもなく困ることであるが、しかしそのくらいの人が少し出てくれてもいいと思うほどに、今は夢がない時代のような気がしてならない。

いま私達が抱く夢は、現実から正確に計算されたもので、どこをしらべてみても桁はずれのと

ころがなく、地上から浮き上がっているところもない。

私も夢らしい夢などを持っていない。ここに書くほどのことは持っていない。けれどもその途方もない夢をかつて抱いたことが想い出されると、それをどこでどのようにして失ったのか、またそれを自分でそれほど気がつきもせずにいたことが悔まれる。そうして、この頃になって、あの夕映えの空を見たときにあの向こうにはもう自分の未来はないと思って愕然とする。

けれどもそれは、夕映えの空に何の責任があるわけではなく、私自身の不心得である。いつの間にか、恐らく周囲から絶えず聞えている、極めて現実的な声に耳を傾けるようになっているうちに、夢を抱く愚かさでも悟ったように、それをもう抱こうとしなくなったのだろう。

高等学校の校舎は三階建で、屋上があり、伝書鳩が飼ってあった。そこは三階の廊下の突きあたりの廊下から、鉄の階段をのぼって行くようになっていたが、どういうものかあまりのぼって来るものがいなかった。晴れた日には、箱根丹沢から富士、笹子、それから秩父連山につづいて上州の山までよく見えたし、都会の空がいつも霞んでいるのも妙に人間の生活を空がうつしているように見えた。

こんな風景は今もそのままである。変わったところでそういわれれば遠方のテレビの塔が見えたりするぐらいである。私が今もう一度母校の屋上にのぼることができたら、昔の夢を何か一つでも想い出すだろうか。たくさんに次から次へと大空に勝手気儘に描いたあれほどの夢があった

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com